

T<sub>3</sub>, T<sub>4</sub> および P<sub>2</sub>, P<sub>3</sub> の比率が高く, また Secretory component (SC) は 22.7% に陽性であった。

〔考察〕: 1) レ線学的に空洞形成・胸膜陥入を伴う末梢部腫瘍をみた場合扁平上皮癌を疑う必要がある。2) 末梢発生腺癌と比較し, 特に p 因子は重要で腫瘍局所進展が予後に影響をおよぼすものと思われる。3) 腺癌類似の病理形態学的特徴, SC の陽性所見等から肺門発生扁平上皮癌と質的に異なる可能性がある。

#### 10) 中心にほとんど瘢痕形成のない肺腺癌の病理学的検討

江村 巖 (新潟大学附属病院 病理部)

渡辺 恒 (岡第二病理学教室)

我々は瘢痕形成のない肺腺癌症例を経験したので, 瘢痕の少ない腺癌及び Atypical alveolar cuboidal cell hyperplasia (AAH) を含め検討した結果を報告する。瘢痕の程度, 癌細胞の分類は下里等の分類に従った。気管支上皮細胞やクララ細胞への分化を示す細胞からなる腫瘍の場合腫瘍の周辺部分でも腫瘍の中心部分でも間質に沿って増殖している腫瘍細胞の核の面積はほぼ同じであった。しかしこれとは別に胸膜の陥入のある部位ではクララ細胞への分化を示す細胞から成る癌と判断できる領域があるが周辺部では AAH と病理組織学的に鑑別できない部位がありこの間に形態学的な移行のある症例があった。このような症例の腫瘍周辺部の腫瘍細胞の核面積は平均 30 $\mu$ m<sup>2</sup>, 中心部では 50~70 $\mu$ m<sup>2</sup> であり危険率 1% 以下で有意差があった。さらに AAH の細胞の核面積の平均値もほぼ 30 $\mu$ m<sup>2</sup> であった。このことは後者の腫瘍が AAH を発生母地としていることを示唆しているものと推定された。

#### 特別講演

##### 肺癌における内視鏡的治療

国立がんセンター放射線治療部

小野 良祐 先生

#### 第18回新潟救急医学会

日時 平成元年 7月15日 (土)

午後 2時より

会場 新潟大学医学部大講堂

#### 一般演題

##### 1) 硫酸マグネシウムが有効であった心室頻拍の2例

三井田 努・本多 拓 (新潟市民病院 救命救急センター)

庭野 慎一・小田 弘隆  
佐藤 広則・樋熊 紀雄 (同 循環器科)

硫酸マグネシウム (MgSO<sub>4</sub>) 静注が有効であった薬剤起因性 Torsades de pointes (Tdp) の2例を経験した。症例1は79才女, PSVT による心不全のため入院。PSVT は af に移行し, Verapamil, Procainamide 経口投与により接合部調律となったが, QT 間隔が 0.60 秒に延長し, Tdp が頻回に出現した。血清 Mg は 2.0 mg/dl と正常であったが, 薬剤起因性 Tdp と診断し MgSO<sub>4</sub> 2.47g 静注した。QT 間隔の短縮はなかったが, 投与直後より Tdp は消失した。症例2は71才男, af のため Disopyramide 300mg の投与を受けていたが, 心不全のため入院。Digoxin 投与後, 接合部調律となり, QT 間隔が 0.55秒と延長し, 単形性持続性心室頻拍と多形性心室頻拍が出現した。薬剤起因性 Tdp と診断し, 直流除細動後, MgSO<sub>4</sub> 2.47g 静注した。投与後, 心室頻拍の再発はなかった。2例とも Mg 投与による副作用はなかった。薬剤起因性 Tdp の治療に MgSO<sub>4</sub> が有効かつ安全と考えられ, 緊急治療に有用であると思われた。

##### 2) 気管・気管支外傷の4例

吉谷 克雄・広野 達彦  
小池 輝明・滝沢 恒世  
矢沢 正知・大和 靖  
中沢 聡・江口 昭治 (新潟大学第二外科)

吉川 恵次 (新潟大学附属病院 救急部)

桜井 淑史・青木英一郎 (新潟市民病院 第二外科)

交通外傷による頸部気管断裂の2例, 気管・気管支断裂の1例, 小児の気管支損傷の1例を報告する。いずれも外傷後の呼吸困難, 皮下気腫, 気胸などの症状で発症し, 気道確保のための気管切開, あるいは気管支鏡にて確診を得た後, 手術により救命した。

外傷性気管・気管支の損傷は稀であり, 合併する他臓

器の損傷による症状が重篤かつ急激であることもあり、早期診断が必要とされる。外傷性気管・気管支損傷は気管分岐部より2.5cm以内に発生することが多く、鈍的胸部外傷後の皮下気腫、縦隔気腫、大量のair leakを伴う気胸、呼吸困難を呈する患者には気管支鏡による精査が必要であり、経過遷延による損傷部の癒着性狭窄や閉塞による感染や無気肺は、気管・気管支形成後の肺機能にも問題があり、可及的に早期診断、早期外科的修復が必要である。

### 3) 当院における腹部大動脈瘤緊急手術例の検討

丸山 行夫・小菅 敏夫 (新潟こぼり病院) 心臓血管外科  
山崎 芳彦 (新潟市民病院) 胸部外科  
江口 昭治 (新潟大学第二外科)

当院では、1984年10月から1989年6月までに、腹部大動脈瘤の緊急手術を8例行った。症例は、男性6例、女性2例で、破裂性腹部大動脈瘤が5例、切迫破裂が3例であった。1例を除き、人工血管によるグラフティングを行ったが、手術死亡(DOT)は1例、病院死亡は3例であった。術中出血量は745mlから6750ml、平均3116mlであったが、自家血輸血システムは有用であった。

破裂性腹部大動脈瘤では、早急な手術治療が必要であり、疑わしい場合には手術治療が可能な施設への早急な搬送が望まれる。

### 4) 創外固定による四肢骨折治療経験

岩瀨 泰宏・勝見 政寛  
山本 康行・今井 春雄  
谷代 弘三・関谷 繁樹 (新潟中央病院) 整形外科  
穂苅 豊・勝見 裕  
田島 達也・吉津 孝衛 (新潟手の外科) 研究所  
牧 裕

はじめに

近年、交通事故や労働災害の多様化に伴い広範な皮膚軟部組織の欠損を伴った四肢開放骨折も増加している。私たちは整復位保持のむずかしい関節周辺の粉碎骨折、広範な軟部組織損傷を伴う開放骨折、骨髄炎を合併した症例に対し創外固定を使用しているので報告する。

症例

1986年から89年の4年間に当科で治療した20例で内訳は男性16、女性4で年齢は16~63才平均35才である。創外固定使用部位は、上肢では上腕骨1、前腕骨7、指骨

2で前腕骨骨折に多くこのうち6例が橈骨遠位端粉碎骨折に使用されていた。一方下肢では大腿骨1、下腿骨9で、下腿骨骨折に多く軟部組織損傷の激しい開放骨折に多く使用されていた。

以下各装着部位ごとに代表症例を呈示する。

### 5) 小児重症型肺炎の1例

松田由紀夫・岩瀨 真  
大沢 義弘・内山 昌則  
広田 雅行・内藤万砂文  
八木 実・飯沼 泰史  
大谷 哲士 (新潟大学小児外科)

重症急性肺炎では肺炎周囲組織の病変に加えて、多臓器障害を伴う為、その死亡率は極めて高い。我々は最近、小児では稀な重症急性肺炎の1例に腹膜灌流、血漿交換を施行し救命することが出来たので報告する。

症例は10才の女児で、マイコプラズマ肺炎の治療後、昭和64年11月24日上腹部痛と嘔吐を主訴に小児科を受診、急性肺炎を疑われ加療を受けたが症状改善が認められず、翌日当科入院。保存的治療にかかわらず腹痛、腹部膨満、呼吸困難の増強、上部消化管出血、Grey-Turner 症候、FDP 上昇が認められた為、重症急性肺炎と診断。入院5日目より17日目迄腹膜灌流を、6日目と7日目に血漿交換を施行した。4月1日当院を退院したが、現在もインシュリン約20単位を連日使用している。本症例はミノマイシンによる薬剤性肺炎と考えられ、重症急性肺炎に対する治療としては腹膜灌流、血漿交換で救命出来た本邦で最初の小児例であると思われる。

### 6) 長期にわたる集中治療により救命し得た重症出血性、壊死性肺炎の1例

吉川 恵次 (新潟大学附属病院) 救急部  
白井 良夫・杉本不二雄  
大谷 哲也・小山俊太郎 (新潟大学第一外科)  
殷 熙安・佐藤健比呂 (同 第二内科)  
森岡 睦美・西村 喜宏 (同 麻酔科)

症例は71才、女性。胆石症の既往、飲酒歴は無い。悪心、嘔吐、腹痛をもって発症。某病院にて急性肺炎と診断され、保存的療法が開始された。しかしながら状態の改善は得られず、呼吸不全、腎不全(non-oliguric)、DICを併発、当院に紹介された。入院時preshock状態であり気管内挿管による呼吸管理を開始。輸液、輸血、血清電解質異常の補正、カテコラミン、利尿剤による尿量の確保、血液凝固異常に対する薬剤投与等も同時に開始した。入院時の全身状態および諸検査結果からは手術によっても良い結果は得られないであろうと判断さ